



Title	「～なり」と「～たとたん」に関する一考察：意味論的観点から
Author(s)	中村, 重穂
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 9, 1-21
Issue Date	2005-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45652
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC009_001.pdf



「～なり」と「～たとたん」に関する一考察 －意味論的観点から－

中 村 重 穂

要 旨

小論は、時に関わる表現「～なり」と「～たとたん」の意義素を國廣(1982)の意味分析の方法を用いて分析し、その語義的特徴と統語的特徴を解明したものである。その結果、両表現とも〈時間的直後〉と〈同時性〉を語義的特徴として有する一方、「～なり」は、「外→内」の移動動詞の前接、及び後件または後続文に於ける前件または後件の動作主体の発話の出現という統語的特徴を、また、「～たとたん」は、動作・作用・変化を表す動詞の前接、及び変化を表す動詞群や前件の動作主体が意志的に制御できない事象を表す表現の後続という統語的特徴をそれぞれ有することが認められた。

最後に今後の課題として、両表現の後件に於ける「意外性」という implication の有無の考察の必要性を述べた。

〔キーワード〕～なり、～たとたん、時間的直後、同時性、発話後続

1. 小論の目的

小論では、時に関わる表現である「動詞・辞書形＋なり」と「動詞・た形＋とたん」の二つの意義素を意味論的に分析し、その意義特徴を解明することを目的とする。これらは、二つの事象の同時性あるいは前後関係を示すとされる一群の表現－「～と同時に」「～や否や」「～がはやいか」「～かと思うと」等々に含まれるものであるが、小論の考察をこれら二つに絞り込む理由は、後述するように、既存の文法書・日本語教材（の一部）に於いてこの両者の説明記述に対立が認められることから、これらを検討・補正する必要があると考えられるためである。以下では、これらを「～なり」及び「～たとたん」と簡略化する。

2. 先行研究の概観とその問題点

「～なり」と「～たとたん」に関する研究論文は、筆者の知る限り江(2000)のみである。江は「～瞬間(二)」、「～途端(二)」、「～ヤ(否ヤ)」、「～ナリ」の四つを採り上げ、そのテンス、アスペクト、出現形態、後件の内容について分析を行っている。それによると、

- 1) 前件テンスは後件テンスに依存し相対的テンスを持つこと
- 2) アスペクトでは、前件が「スル」形なら「～瞬間(二)」は未完了、「～ヤ(否ヤ)」と「～ナリ」は完了となり、「シタ」形の場合は「～瞬間(二)」と「～途端(二)」が完了を表すこと
- 3) 前件動作が明確な限界点を持つ動詞の場合は、局面が「始発」「終了」に特定され、後件の出来事によって前件の局面が決まるが、限界点を持たない動詞の場合は「始発」の局面に限定され、語義そのものがある局面を表す動詞では個々の持つ語義によって局面が決まること
- 4) 後件は、「スル」形では未完了を、「シタ」形では完了を表し、「シテイル」形では「結果の状態の継続」とパーフェクトの意味を表すこと
- 5) 「～ヤ(否ヤ)」と「～ナリ」は会話文中では使われにくく、「～瞬間(二)」と「～途端(二)」は会話文中で使われやすいこと
- 6) 「～瞬間(二)」、「～ヤ(否ヤ)」、「～ナリ」の後件は意図的な内容も非意図的な内容も表すことができるが、「～途端(二)」の後件は、殆どが非意図的な内容であること
- 7) 「～瞬間(二)」の前件と後件の両事象の時間的關係は同時的であるが、「～途端(二)」にはそのような時間意識が希薄であること

の7点が挙げられている。これらの分析は詳細ではあるが、江が立てている方法論的前提には少なからず問題があると筆者には思われる。

まず、江(2000:75)は、上記四表現の「共通点と相違点を明確にする」と述べているが、後件の特徴や前件と後件の間關係を検討する場合、四つの表現全てを採り上げず、一つの表現のみを分析することで代表させてしまっており、この点で上記の課題を充分には達成していない。

また、四つの表現の「差異について、現代小説97冊を資料とし、小説の会話文と地の文における用例数を示す」〔江(2000:85)、表1参照〕ことによって、これら四つを上(5)で見たように「～ヤ(否ヤ)」及び「～ナリ」と「～瞬間(二)」及び「～途端(二)」の二つに区分している。

表1：江（2000）に於ける四表現の用例数

形式 \ 用例数	会話文	地の文	計
	用例数	用例数	用例数
～瞬間（二）	1 3	1 1 0	1 2 3
～途端（二）	1 4	1 3 1	1 4 5
～ヤ（否ヤ）	2	9 0	9 2
～ナリ	0	5 9	5 9

しかし、この場合、「会話文」と言ってもそれはあくまでも小説という「書かれた日本語」の中でその一部として作られた「会話文」であり、それが現実の会話に於ける現れ方と等値／近似である保証はない。

これについて、現代日本語研究会（2002）収録の延べ約21時間分の話しことばコーパスを調べた結果、これらの出現実数は表2の通りであり、このデータを見る限り、江のように「～ヤ（否ヤ）」及び「～ナリ」と「～瞬間（二）」及び「～途端（二）」に二分することに説得力は認められない。

表2：現代日本語研究会（2002）に於ける四表現の出現実数

男女別 \ 形式	～ヤ（否ヤ）	～ナリ	～瞬間（二）	～途端（二）
男性談話（約12時間）	0	0	1	0
女性談話（約9時間）	0	0	0	1

以上から、江の分析はその有効性におお疑義が附されるものと考ええる。

次に、文法書・日本語教材¹⁾の分析を見てみると、まず、森田（1988：801-803）は、「～なり」を「ある特定の状況や様子をとると、そのまま次の（望ましくない）行為や状態に引き続き移ることを表す」と説明し、「同一主体の意志的な事柄に限られ…（中略）…前件に述べた様子が、後件に述べる行為の始まり、きっかけとしての状況説明となっている」とする。また、「～たとたん」については、「何か行為をなしたり、ある現象や状況変化が起こると、直ちに時を合わせて、たまたま、あるいはそれに関連した現象や状態変化が生ずることを表す」と説明し、さらに「行為や現象と結果との間に因果関係がある場合と…（中略）…偶然の一致とがある」と述べている。

この森田の、「～たとたん」に於ける「因果関係」と「偶然の一致」の二者の認定に対し、白川（2001：455-456）は、「因果関係」のみを認め、

他を退ける。白川は、まず「～と同時に／～た（か）と思うと／～か～ないかのうちに／～たとたん（に）」の四つについて、それらの意味を「二つの出来事PとQが同時に、あるいはほとんど間隔を置かずに起こることを表す」と説明し、「～たとたん（に）」を「『～と同時に』と大変似ていますが、異なるのはPがきっかけや原因となってQが起こるというニュアンスがあるという点です」と述べ、さらに、「そのような因果関係がなく、単にPとQがほぼ同時に起こったといたい場合には、『～たとたん（に）』は不自然」としており、この点で森田と異なる。「～なり」については、それ自体を直接の説明の対象とはせず、「～と同時に」「～た（か）と思うと」と「ほぼ同じ意味で使える表現」と述べるに留まる。

また、池松・奥田（1997：129-130）は、「～なり」については「ある動作に続いて、すぐ次の動作や作用が起こる」と記し、「～たとたん（に）」については、その意味を「直後に」と簡単に述べた上で、「予想しなかったという意外性を含む」〔池松・奥田（1997：67-68）〕と述べている。

さらに、友松他（1996：42-44）は、「～なり」を「『～をすると同時に、ふつうではない動作をした』と言いたいときに使う」と説明し、「～たとたん（に）」については「『～が終わったのとほとんど同時に予期しないことが起こった』と言いたいときに使う。前のことと後のことは、互いに関係があることが多い」と述べている。

これとはほぼ同様の説明を提示しているのはグループ・ジャマシイ（1998）（以下G Jと略）である。「Vーたとたん（に）」は、G J（1998：344）に於いては「動詞のタ形を受け、前の動作や変化が起こるとすぐ後に、別の動作や変化が起こるということを表す」とされ、さらに、「後の動作・変化を話し手がその場で新たに気付いたような場合に用いられるため、『意外だ』というニュアンスを伴うことが多い」と説明されている。また、「Vーるなり」は、「動作を表す動詞に付いて、『その動作の直後に』という意味を表す。…（中略）…その動作の直後に予期しない出来事が起こる場合に用いられる」〔G J（1998：405）〕と述べられている。しかし、G Jでは「Vーるなり」の説明記述に於いて「Vーたとたんに」を併記しており、「直後」という時間的前後関係と「意外性」という implication の共通性から両者を同義／互換可能なものと見なしていると考えられ、相違についてはむしろ分明ではなくなっている。

以上は、どちらかと言えば「～なり」と「～たとたん」の違いを示そう

とするものであるが、むしろ共通性を示す、あるいは一括して説明するものとして、益岡・田窪(1992)及び生田目(1996)がある。益岡・田窪(1992:189)は、「～とたん(に)」と「～なり」を一括して「副詞節の表す事態が終わった時と、主節の表す事態が始まる時とが同時であることを強調するもの」と説明し、生田目(1996:41-42)は、これらを「ある動作・作用が前に行われた動作・作用のすぐ後に行われることを強調する場合」に用いられるものと捉え、「～なり」については、「動詞の基本形に付く。前文に行われた動作・作用の状況のまま、引き続いて次の動作・作用に移る意を表す」と説明しているが、「～た(だ)とたん(に)」については、「動詞の連用形に付く」と述べるに留まっている。

以上の通り、これらの表現に関する説明記述の中には、差異を提示するものと共通の特性で括るものがあるが、特に前者については；

- a. 前件と後件の時間的關係、特に「直後」と「同時性」について
- b. 前件と後件の關係、特に因果關係の有無

の二点を中心として(再)検討が必要であると考えられる。そこで、小論では、両者の共通性の抽出をも視野に収めつつ、これら二点の解明を目標として分析を進めることとする。

3. 分析の対象と方法

小論では、國廣(1982)による意味分析の方法を用いた。本章では、まず、基礎資料となる用例抽出と分析の方法について簡単に説明しておく。

3.1 基礎資料の抽出の手順

小論で採り上げる基礎資料の抽出手続きは以下の通りである。

- 1) 小説、エッセイ、評論、ルポルタージュからなる計32冊の文献から「～なり」40例と「～たとたん」46例を採集した。
- 2) 概ね段落または場面単位で「～なり」と「～たとたん」の各用例を全て両者併記([動詞・た形+とたん 動詞・辞書形+なり])に書き換えた選択式の質問項目化し、日本人インフォーマント3名(40代2名と50代1名の東京語話者)にその適合性について(両者とも適合あるいは両者とも不適合の場合も含めて)内省による判定を依頼した。
- 3) 上記1)の結果から、インフォーマント3名全員が、「～なり」のみが適合すると判定した用例4例、「～たとたん」のみが適合すると判定

した用例22例、両者とも適合すると判定した用例7例を抽出した。

- 4) 但し、両者とも適合と判定された7例中3例は、連体修飾節内に「～なり／～たとたん」を含むものであったため、統語構造の差異が意義特徴の顕れ方に影響を与える可能性を思量し、これら3例を除外した。
- 5) 上記計30例を基礎資料として確定し、これら以外の56例を棄却した。
- 6) その他に、森田と白川が対立する「～たとたん」に於ける「因果関係」の有無を確認するために、白川が挙げている例文に関し、前記の3名のインフォーマントに対して上記の調査とは別に追試を行った。

3.2 分析の方法

分析の方法としては、3.1に記したように、まず対照的作業原則〔國廣（1982：241-243）〕に則り、原文が「～なり」の資料に対しては「～たとたん」を、原文が「～たとたん」の資料に対しては「～なり」をそれぞれ対比項とし、インフォーマントの内省によって「～たて」のみと「～たばかり」のみが適合する用例を抽出した。これによって、それぞれの表現の最小対立的文脈〔國廣（1982：242）〕を確定した。

そして、同位置の作業原則〔國廣（1982：202）〕を用いて両表現の paradigmatic な関係を見ることにより、それぞれの表現が有する前件・後件の特徴を解明することを試みた。また、併せて呼応の作業原則〔國廣（1982：202）〕を用いて syntagmatic な関係を見ることにより、統語構造上の特徴を明らかにするとともに、「～なり」と「～たとたん」の両方が paradigmatic に互換可能な文脈的意味分野〔國廣（1982：222-223）〕を持つ用例をも採り上げ、これを最小対立的文脈と paradigmatic に比較してみることを通じて、同位置の作業原則に対して補完的にそれぞれの表現の前件・後件の特徴を明らかにするようにした。

以上の文脈的作業原則〔國廣（1982：202）〕を通じて「～なり」と「～たとたん」の意義素に認められる意義特徴とその統語構造上の条件を解明し、2章のa、bの問題を検討することを試みた。その際、単文レベルでは判断が困難な用例については前後の文脈からも検討を行った。

3.3 基礎資料となる用例

以下に分析対象とした用例を挙げる。用例の番号は、調査票の通し番号であるが、小論では「～なり」のみが適合したグループ、「～なり」と「～

たとたん」の両方とも適合したグループ、「～たとたん」のみが適合したグループの三つに区分して提示した。その際、両方とも適合したグループに関しては、原文の表現に下線を付しておいた。また、表記の統一上、原文が「途端」となっているものも小論では全て「とたん」と表記した。

()内の略号は書名、数字はページを表す。正式書名は稿末に掲載した。

なお、調査票には各表現を概ね段落単位（但し、文の主題や対象に応じて前後の段落まで含む）で記載したが、小論では紙数の都合上各表現のみを含む文にできる限り限定して示し、同一文脈に複数の用例を含むものについては、通し番号の後にさらに下位番号を付して区別した。但し、分析の必要上前後の文脈を提示することもある。

・「～なり」

14) 女は入ってくるなり椅子に片足を乗せて両腕を組んだ。(ア・113)

32) 牧野蘭子が入ってくるなり、自分でカーテンをひき、窓を開けた。

(パ・120)

50) ロエスは帰ってくるなり、まっすぐ父親の部屋へ行って、こんなことを訊ねたという。「父さん、ヒトは、無限に生きることはできないの？」

(ブ・107)

69) 「うーん、これはまた珍しいですねえ！」ぼくは席に座るなりホステスの頭をしげしげと眺め、へえ日本髪ってこうなってるのかァと感心した。

(東・70)

・「～なり」＝「～たとたん」

6) すると父が改札で仁王立ちになって待っている。父は改札を出るなり／出たとたん、私をぐうで殴り、送ってくれた彼等に向かってひとこと。「こんな女とつきあうなっ！」

(死・104)

8) 私が助手席に座るなり／座ったとたん、男は金切り声をあげる。「なんでSと寝た」

(消・66)

66) 何番目かに訪れた管理事務所でのことだった。なかに入るなり／入ったとたん社員らしき男性から、「僕、新幹線で一緒の車両でした。土地を見に行くって聞こえたので、うちにも来てくれたらいいなあと
思ってたんです」と歓迎されてしまった。

(木・199)

67) 門を入るなり／入ったとたん、まずこう思った。「混んでいる…」

・「～たとたん」

- 2) 看護婦さんが管をさわったとたん、私の管からおしっこが噴水のよう
にバーッと出て、看護婦さんの顔に『顔面シャワー』。(死・45)
- 3) お昼になり、木陰でちょっと休もうかと腰を下ろしたとたん、左の
お尻のほっぺに痛みを感じました。(死・78)
- 4) ある日豪雨の中、九州自動車道から降りようとインター出口で減速
したとたん、大スリップ。(死・101)
- 9) きっと入れると思ったとたん、どうしても入ってみたいなくなった。
(消・122)
- 10) 言葉にしたとたん、現実はまだ姿を変える。(消・254)
- 13) 「……真利江？」 そう言葉にしたとたん、どっと恐怖が降り注い
で鼓動が早くなる。(ア・72)
- 21) しっかりしろよ、と抱きしめられたとたん、頭のどっかの留め金が
吹っ飛んで狂おしいほど欲情してきた。(コ・124)
- 23) 粒々なんかない。幻覚だ。しっかりしろ。そう思ったとたん、粒々
が消えた。(コ・250)
- 31) 呼び止められたとたん、ナオズミは後ろをふり返って、大声で、「ギャ
オーッ！」と、ゴジラをやったのだった。(森・171)
- 42) 一分後に事故で死んでも、泣いてくれる人すらいなと思った
とたん、体が震えるほどの寒気が襲いかかる。(L S・115)
- 43) やがて書類ケースの中に表紙が擦りむけた古い黒革の手帳が見つ
かった。開こうとしたとたん、一枚のスナップ写真が床に落ちた。
(L S・115)
- 47)-1. 何か応えようとして口を開けたとたん、また、がさがさという
音が聞こえた。(L S・212)
- 47)-2. 「え？」と聞き返したとたん、プツリとかすかな音と共に電話は
切れた。(L S・212)
- 61) ところが、ホステスをやめたとたん「自分の価値」がわからなくなっ
てしまった。(馬・200)
- 65) どこかでつばみがほころんだとたん、あっというまに情報が広がり
みんなそわそわし始めるのだ。(木・112)

- 77) ところが、それが“西側”に入ると、がらっと事情が一変してしまう。国境を越えたたとたん、人が“スレて”しまう訳だ。(戦・154)
- 79) 壊れかけた椅子に腰を下ろしたとたん、急にまた眠気が襲ってきて、目の前に出てきたビールを飲んだら、ぶくぶくぶくって店ごと水底に沈んでいった。(昨・88)
- 80) 「へらへら、笑ってんじゃねえ」 加納がさらに間を詰めたとたん、長身の少年が加納の腹を足で蹴った。(モ・170)
- 81) 一時は息苦しくなったけれど——意識が朦朧とするほどつらくなっていたけれど、「母さん、助けて」と叫んだとたん、気力が甦って来た。(壇・146)
- 82)-1. 恋愛というのも、相手を所有したいと思ったとたん相手に見事に支配されてしまう。(で・139)
- 82)-2. お金というのも、お金を所有したいと切望したとたん、お金に支配されてしまう。(で・139)
- 82)-3. 身体を意のままにしたいと思ったとたん、身体から支配されるのだ。(で・139)
- 以上が小論で分析の対象とする用例である。

4. 分析

4.1 分析(1)―両表現の時間的意味―

2章の先行諸研究に於いて「～なり」と「～たとたん」の意義特徴は、時間的「直後」の意味を表すものと説明されている。このことは、前章の用例の「～なり」と「～たとたん」それぞれの従属節の後ろに一定の時間の経過を表す表現、例えば「暫く経ってから」を挿入してみた場合、これらの用例の適合性に違和感が生じることからも明らかである。ここでは紙幅の都合上全ての用例にこの操作を行うことができないため、「～なり」と「～たとたん」が互換性を持つ用例から例を挙げる。

？6) 父は改札を出るなり／出たとたん、[暫く経ってから]私をぐうで殴り、送ってくれた彼等に向かってひとこと。

しかしながら、先行研究の中には、時間的「直後」(のみ)ではなく、前件と後件の事象の同時性を認めているもの(白川(2001)、友松他(1996)、益岡・田窪(1992))がある。そこで、これについて用例を検討してみると、まず、「～なり」の場合には、

14) 入ってくる → 椅子に片足を乗せて両腕を組む

32) 入ってくる → カーテンをひき、窓を開ける

50) 帰ってくる → 父親の部屋へ行って、訊ねる

69) 席に座る → ホステスの頭をしげしげと眺める

という同一主体の動作の連続であり、前件の動作が終結しない限り後件の動作は実現しようがなく、「～なり」が時間的「直後」を表すものとなっていることが分かる。一見同時性が成り立っているかのように見える69)の場合でも、あらためて「しげしげと眺める」という行為は、席に座ることで初めて可能となる行為であり、他の3例と同様行為の時系列的な継起を表すと考えてよい。

次に、「～なり」と「～たとたん」に互換性がある用例の場合、

6) 改札を出る → 殴る

66) なかに入る → 歓迎される

は、上記「～なり」の用例と同様に考えることができる。また、

67) 門に入る → 「混んでいる…」と思う

は、この文章の著者が東京ディズニーランドを訪れた時の感想であるが、この場合でも、実際に門をくぐって東京ディズニーランドの中に入るという動作が完了し、眼前の光景を認識してからこのような思念が生じたものであって、そこにはいかに短い時間であれタイム・ラグが存在する。

しかしながら、

8) 私が助手席に座るなり／座ったとたん、男は金切り声をあげる。

については、前件と後件の動作主体が異なることから、事象として「私が助手席に座った直後に男が金切り声をあげる」という継起的な解釈と、「私が助手席に座ったのと全く同時に男が金切り声をあげる」という同時的な解釈の両方が成立し得る。

「～たとたん」の用例についても同様のことが考えられる。

まず、継起性について考えてみると、例えば、前件の前接動詞が上記8) とほぼ同義かつ前件と後件の動作主体が同一でいかにも同時的な解釈が成り立ち得るかのような用例3) を取り上げてみよう。この、

3) 腰を下ろした → 左のお尻のほっぺに痛みを感じた

という過程を厳密に考えると、座面に尻が接触（する動作が完了）した時点と、座面にあった何ものかによって身体に刺戟が与えられ、それが痛覚として知覚されることの間にはたとえどんなに短い一零コマ何秒という

一時間でも刺戟が神経を伝達される時間が存在するはずであり、そこでは厳密な意味で同時性は成立せず、継起的な解釈を採ることができる。他の用例に関してもこのような継起的な解釈が可能であるが、他方、同時性についてまた「～なり」の場合と同様の事例が認められる。

用例47)-1を見てみると、8)と同様、前件の動作主体と後件の動作主体が異なっており；

47)-1. 口を開けた → がさがさという音が聞こえた。

の両事象の時間的關係について、「何か応えようとして口を開けた直後に、また、がさがさという音が聞こえた。」という継起的な解釈と、「何か応えようとして口を開けたのと全く同時に、また、がさがさという音が聞こえた。」という同時性の解釈が成立可能である。

以上の考察から、「～なり」と「～たとたん」のいずれもが；

- ①. 前件の事象が生起／終了した直後に後件の事象が生起する、という〈時間的直後〉
- ②. 前件の事象が生起／終了するのと同時に後件の事象が生起する、という〈同時性〉

の意義特徴を有し、その意味の違いは、前件と後件の動作主体の異同には関係なく、事象そのもののあり方によることが認められる。

以上が両者の時間的意味である。

4.2 分析(2)－因果関係の有無－

本節では、特に「～たとたん」に関する見解の対立が最も鮮明となっている前件と後件の間の「因果関係」の有無について検討する。

2章で述べたように、森田（1988）は、「～たとたん」に「因果関係」と「偶然の一致」の二つを認めるが、白川（2001）は、「因果関係」のみを認めて、因果関係がない場合の「～たとたん」を不自然とする。

まず、このことを検証する簡便な方法として、3章に挙げた「～たとたん」の用例を全て「～たから／ので」に置き換えてみよう。この場合、前件と後件の文法的な陳述上の制約は無視して、因果関係の整合性のみを考えることにする。これにより、「～たから／ので」に置き換えた場合に整合性が成立しない文があれば、その文は、「因果関係が成立していないのに原文では「～たとたん」の適合性が認定されている文」ということになり、「～たとたん」は因果関係に関わりなく使用できることが証明される

からである。以下、用例を一部短縮して再提示する。

- 2) '看護婦さんが管をさわったから／ので、私の管からおしっこが噴水のようにバーッと出て、看護婦さんの顔に『顔面シャワー』。
- 3) '木陰でちょっと休もうかと腰を下ろしたから／ので、左のお尻のほっぺに痛みを感じました。
- 4) 'インター出口で減速したから／ので、大スリップ。
- 9) 'きっと入れると思ったから／ので、どうしても入ってみたいくなった。
- 10) '言葉にしたから／ので、現実はまだ姿を変える。
- 13) '「……真利江？」　そう言葉にしたから／ので、どっと恐怖が降り注いで鼓動が早くなる。
- 21) '抱きしめられたから／ので、頭のどっかの留め金が吹っ飛んで狂おしいほど欲情してきた。
- 23) 'そう思ったから／ので、粒々が消えた。
- 31) '呼び止められたから／ので、ナオズミは後ろをふり返って、大声で、「ギャオーッ！」と、ゴジラをやったのだった。
- 42) '泣いてくれる人すらいないんだと思ったから／ので、体が震えるほどの寒気が襲いかかる。
- 43) '開こうとしたから／ので、一枚のスナッフ写真が床に落ちた。
- 47)-1'. 口を開けたから／ので、また、がさがさという音が聞こえた。
- 47)-2'. 聞き返したから／ので、プツリとかすかな音と共に電話は切れた。
- 61) 'ホステスをやめたから／ので、「自分の価値」がわからなくなってしまった。
- 65) 'つばみがほころんだから／ので、あっというまに情報が広がりみんなそわそわし始めるのだ。
- 77) '国境を越えたから／ので、人が“スレて”しまう訳だ。²⁾
- 79) '壊れかけた椅子に腰を下ろしたから／ので、急にまた眠気が襲ってきて、目の前に出てきたビールを飲んだら、ぶくぶくぶくって店ごと水底に沈んでいった。
- 80) '加納がさらに間を詰めたから／ので、長身の少年が加納の腹を足で蹴った。
- 81) '「母さん、助けて」と叫んだから／ので、気力が甦って来た。

82)-1'. 相手を所有したいと思ったから／ので相手に見事に支配されてしまう。

82)-2'. お金を所有したいと切望したから／ので、お金に支配されてしまう。

82)-3'. 身体を意のままにしたいと思ったから／ので、身体から支配されるのだ。

上記諸例を見ると、殆どの用例で「～たから／ので」への置換が成立する＝因果関係を認めることが可能であると言えるが、3)'、47)-1'、47)-2'の3例についてはその適合性について検討の必要がある。3)'は、一見成立する一例えば、以前怪我をした箇所が急に腰を下ろしたために痛んだ一ようにも見えるが、インフォーマントに提示した原文にはそのような記述はなく、また、47)-1'についても、「がさがさという音」は、口を開けた音ではなく、電話の相手方から聞こえてきた音である。その上で、これら3例を検討してみると、前件の「腰をおろした／口を開けた／聞き返した」ことと後件の「痛みを感じた／音が聞こえた／電話が切れた」こととの間には、因果関係が成立しているとは認められず、これらはむしろ森田の言う「偶然の一致」であると解釈される。

また、「～なり」と「～たとたん」に互換性があると判定された4例をも見てみると、これらの、

6) 改札を出る → 殴る

8) 私が助手席に座る → 男が金切り声をあげる

66) なかに入る → 歓迎される

67) 門に入る → 「混んでいる…」と思う

という前件事象と後件事象の間にも、前節で継起的関係であると述べた以上の、因果関係は見出されない。特に用例6)と67)は、原文が「～たとたん」であることから考えても、「～たとたん」の用法が因果関係のみに限定されるとは言い難い。

以上より、白川の、「～たとたん」は因果関係が成立しない文には不自然である、という説明は成立しない。さらに言えば、白川の説明に従うと、「～たとたん」が許容される文であれば、因果関係がなく単に〈時間的直後〉を表す継起的な「～たとたん」の文も因果関係と解釈されることになり、この意味で白川の説明は、「前後関係即因果関係の誤謬 (post hoc, ergo propter hoc)」を犯すことになる。以上から、

③. 「～たとたん」は、因果関係の有無に関わりなく使用可能であるということをまとめとしておきたい。(このことは、互換可能な用例の検討から「～なり」についても成立すると言える。)

なお、白川(2001:456)が、「～たとたん」が因果関係のない文には不自然となることを例証するために提示している例文のうち、

(9) 空が暗くなったとたんに、雨が降ってきた。(番号(9)は原文のもの)
は、上の例証のためには不適切な例文であることを付言しておきたい。

白川は、この例文に「×」を付してそれが成立しないことを示しているが、東京語話者である筆者の内省では、この文は十分に成立するものであり、白川のこの断定に疑問を抱かずにはいらなかった。そこで、今回適合性調査を依頼した3名のインフォーマントに、(9)の文を、

(9)' 空が暗くなったとたん、雨が降ってきた。

と書き換えた上で、その適合性について追試を依頼した。この場合、追試は「～なり」を対比項とせず、あくまでもこの「～たとたん」のみが成立可能であるか否かを問うものとし、(9)で「～たとたんに」となっていた点については、(i)他の用例と合わせること、及び(ii)白川自身が「『に』の有無による意味の違いはありません」と述べていることを勘案して「に」を省いた形で提示した。その結果、3名全員が(9)'を成立可能と判定し、白川の内省(?)の不適切さが明らかとなった。

白川は、この文を因果関係がない文として例示しているが、この場合、前件の「空が暗くなった」は、実は「雨雲が出てきた」=降雨の条件が成立したという具体的事態を述べているものであり、前件に具象化転用〔國廣(1982:127)〕が生じている例を用いてしまったことに気付かなかったがゆえに前件と後件の関係解釈に誤謬を生じたものである。

このように、白川が意味説明に用いている例文は不適切であり、それが2章で引用したような誤った見解に繋がったと考えられる。³⁾

4.3 分析(3)―両表現の統語的特徴―

本節では、両表現の統語的特徴について検討することとする。

4.3.1 「～なり」の統語的特徴

「～なり」の用例は、いずれもある明確な統語的特徴を有していることが明らかである。これらの、「～なり」に前接する動詞を見てみると、

- 14) 入ってくる
- 32) 入ってくる
- 50) 帰ってくる
- 69) 席に座る

という、いずれも場所の移動を、もっと言えば「外→内」の移動を表す動詞になっている。用例69)「席に座る」は、一見「外→内」の移動とは見なし難いが、この用例は、バーでの場面であり、バー全体の空間の中で著者が座るべき指定された場所へ移動した、と考えれば広義に「外→内」の移動に含めることが可能である。

しかも、このことは、「～なり」と「～たとたん」が互換可能な例；

- 6) 出る
- 8) 助手席に座る
- 66) なかに入る
- 67) 門に入る

でも同様である。用例6)「出る」は、調査票に記載した先行部分では著者がアルバイト先から帰宅する場面であり、帰宅の一過程として「改札を出る」ことが分かる。そのため、これも「アルバイト先＝外→内＝自宅近辺」への移動を表すと考えられ、以上から、「～なり」の前接動詞は「外→内」の移動を表す動詞である、と規定することができる。

しかも、視点を「～なり」の後続部分（→後件のみではない）に移すと、「～なり」の文には、「～なり」の前件または後件の動作主体による何らかの発話が後続する、というさらなる統語的特徴が見出される。3章の用例では50)に、

「父さん、ヒトは、無限に生きることはできないの？」
という発話が後続しており、また、69)でも直接的な発話ではないが、

「へえ日本髪ってこうなってるのかァ」
という“心内発話”が後続していることが分かる。

さらに、3章の用例では省略したが、インフォーマントに送付した調査票では、14)と32)にも以下のような発話が後続している。

- 14)→「なにをぐずぐずしているの、本当にお前はのろまな子だね」
- 32)→「あなた、まだ、寝ていたの」

そして、このことは、「～なり」と「～たとたん」が互換性を持つ用例にも該当する。それぞれ、発話部分だけを再確認すると、

6) 「こんな女とつきあうなっ！」

8) 「なんでSと寝た」

66) 「僕、新幹線で一緒の車両でした。土地を見に行くって聞こえたので、うちにも来てくれたらいいなあと思ってたんです」

67) 「混んでいる…」

となっている。これらのうち、66) は、「～なり／～たとたん」の後件に含まれており、67) は、69) と同じく“心内発話”であるが、いずれも上記の特徴に背馳するものではないことが看取できよう。

以上から、「～なり」の統語的特徴として、

④. 「外→内」の移動動詞が前接し、後件または後続文に前件または後件の動作主体の発話（“心内発話”を含む）が現れる
ということが認められる。

4.3.2 「～たとたん」の統語的特徴

「～たとたん」の前接動詞を見ると、これらは、「さわる／（腰を）下ろす／〔車を〕減速する／思う／（言葉に）する／抱きしめ（られ）る／呼び止め（られ）る／〔手帳を〕開く／開ける／聞き返す／やめる／越える／（間を）詰める／叫ぶ／切望する」（〔 〕は引用者註）と、全て人の意志的な動作を表す動詞である。しかし、用例65) で「（つぼみが）ほころぶ」という非意志的な作用／変化を表す動詞が許容されているため、前接動詞を意志的な動作動詞に一元化することはできず、基本的に動作・作用・変化を表す動詞であれば前接可能であるということになる。

他方、後件を検討すると、その主節動詞は前接動詞よりさらに多様であるが、まず看取できることとして、これらのうち「（おしっこが）出る／感じる／なる／変える／（恐怖が）降り注ぐ／欲情する／消える／（寒気が）襲いかかる／わからなくなる／（情報が）広がる／（そわそわ）し始める／（人が）スレる／（眠気が）襲う／（気力が）甦って来る」は心理的・生理的・物理的な変化を表す動詞群として抽出できることが解る。

これら以外の用例（一部短縮）；

4) 九州自動車道から降りようとインター出口で〔車を〕減速したとたん、〔車は〕大スリップ〔した〕。（〔 〕は引用者註）

31) 呼び止められたとたん、ナオズミは後ろをふり返って、大声で、「ギャオーッ！」と、ゴジラをやったのだった。

43) 開こうとしたとたん、一枚のスナップ写真が床に落ちた。

47)-1. 何か応えようとして口を開けたとたん、また、がさがさという音が聞こえた。

47)-2. 「え？」と聞き返したとたん、プツリとかすかな音と共に電話は切れた。

80) 加納がさらに間を詰めたとたん、長身の少年が加納の腹を足で蹴った。

82)-1. 恋愛というのも、相手を所有したいと思ったとたん相手に見事に支配されてしまう。

82)-2. お金というのも、お金を所有したいと切望したとたん、お金に支配されてしまう。

82)-3. 身体を意のままにしたいと思ったとたん、身体から支配されるのだ。

は、全て「～たとたん」の前件と後件の動作主体が異なっており、しかも、後件の事象は、前件の動作主体が制御できないものとなっていることが解る。⁴⁾

以上の考察から、「～たとたん」の統語的特徴は、

- ⑤. 動作・作用・変化を表す動詞が前接し、また、心理的・生理的・物理的な変化を表す動詞群や、前件の動作主体が意志的に制御できない事象を表す表現が後続する

とまとめることができる。

5. まとめ—結論と今後の課題—

前章までの諸分析①～⑤から、「～なり」と「～たとたん」の意義素を構成する意義特徴をあらためて整理する。

まず、「～なり」については、その語義的特徴として、

a-1. 前件の事象が生起／終了した直後に後件の事象が生起する、という〈時間的直後〉

a-2. 前件の事象が生起／終了するのと同時に後件の事象が生起する、という〈同時性〉

を有し、また、統語的特徴として、

b. 「外→内」の移動動詞の前接

c. 後件または後続文に於ける、前件または後件の動作主体の発話（“心

内発話”を含む)の出現
を有することが明らかとなった。

他方、「～たとたん」については、「～なり」と同様に、

a-1. 前件の事象が生起／終了した直後に後件の事象が生起する、という〈時間的直後〉

a-2. 前件の事象が生起／終了するのと同時に後件の事象が生起する、という〈同時性〉

という語義的特徴を有するとともに、

d. 動作・作用・変化を表す動詞の前接

e. 心理的・生理的・物理的な変化を表す動詞群や、前件の動作主体が意志的に制御できない事象を表す表現の後続

という統語的特徴を有することが示され、また、消極的条件として、

f. 因果関係の有無に関わらず使用可能

ということが認められた。

以上が、小論に於ける「～なり」及び「～たとたん」の意義素分析に関する結論であるが、今後のさらなる課題として、池松・奥田(1997)、友松他(1996)、G J(1998)が言及していた後件の「意外性」という implication の存否の検討を挙げておく。小論の範囲内でも、「～たとたん」については、前件の動作主体が制御不可能な事象が後件に現れるということから、後件に(前件の動作主体から見ての)「意外性」が含意されるであろうことが推定できるが、友松他(1996)やG J(1998)が指摘するように、「～なり」にもそのような含意が認められるかどうかはさらに考察が必要である。この課題に答えることは他日の機会に譲ることとしたい。

註：

- 1) 小論では、「～なり」と「～たとたん」の両方を項目として採り上げているもののみを対象とした。
- 2) この77)' は、一見因果関係が成立しないように見えるが、調査票には(旧)共産圏諸国と西側諸国との人柄の違いを述べている文章であることが分かるように引用したので、ここでは成立するものとしてある。
- 3) その他に、この項目を分担執筆した人物の方言によるバイアスが原因であることも考えられる。
- 4) これは、2章で見た江(2000)が挙げる特徴6)と共通する。

参考文献：

- 池松孝子・奥田純子（1997）『「あいうえお」で引く日本語の重要表現文型』専門教育出版
- 國廣哲彌（1982）『意味論の方法』大修館書店
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 現代日本語研究会編（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 白川博之監修（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 江雯薫（2000）『「～瞬間（ニ）」、「～途端（ニ）」、「～や否や」、「～ナリ」—その共通点と相違点について—』岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第9号 岡山大学大学院文化科学研究科
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（1996）『どんな時どう使う日本語表現文型500』アルク
- 生田目弥寿（1996）『日本語教師のための現代日本語表現文典』凡人社
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 森田良行（1988）『基礎日本語辞典』角川書店

用例出典（副題省略）：

- 阿刀田高（1984）『壇詰の恋』講談社（壇）／岩城宏之（1990）『森のうた』朝日新聞社（森）／佐伯誠（2002）「ブラボー」『翼の王国』No.392 全日空（ブ）／高木美保（2002）『木立ちのなかに引っ越しました』幻冬舎（木）／田口ランディ（1999）『もう消費すら快樂じゃない彼女へ』晶文社（消）／田口ランディ（2000）『アンテナ』幻冬舎（ア）／田口ランディ（2000）『コンセント』幻冬舎（コ）／田口ランディ（2000）『できればムカつかずに生きたい』晶文社（で）／田口ランディ（2000）『馬鹿な男ほど愛おしい』晶文社（馬）／田口ランディ（2001）『昨晚お会いしましょう』幻冬舎（昨）／田口ランディ（2001）『モザイク』幻冬舎（モ）／千田真（1996）『ぼくの戦場記者日記』砂書房（戦）／林雄司編（2000）『死ぬかと思った』アспект（死）／原田宗典（1995）『東京見聞録』講談社（東）／平岩弓枝（1991）『パナマ運河の殺人』角川書店（パ）／唯川恵他（1999）『Love Songs』幻冬舎（L S）

謝辞：

小論執筆に当たり、適合性調査にご協力をいただいたインフォーマントの方々に厚く御礼申し上げます。

なかむら しげほ（留学生センター助教授）

A Study of “-NARI” and “-TA TOTAN”

– from a semantic point of view –

NAKAMURA, Shigeho

This paper aims at clarifying the semantic and syntactic features of temporal expressions “-NARI” and “-TA TOTAN” using the semantic analysis methodology of Kunihiro (1982). It was found that both expressions have semantic features of “temporally immediately after” and “simultaneity.” As well, “-NARI” has a syntactic feature that a movement verb from the outside into the inside precedes it and an utterance by an agent in the main-clause or the subordinate-clause follows it. On the other hand, it was found that a verb expressing an action or a change precedes “-TA TOTAN” and verbs expressing a change or an uncontrollable affair or phenomena appear after it in the main-clause. Finally, as a future issue in this research area, an investigation into whether an implication of “unexpectedness” can be involved or not in the main-clause of both expressions will be needed.